

# 白鳥乙女と虎乙女

——異類婚論考一端——

鈴木 満

〔一〕

東晋（三一七—四一九）の初めその該博な学識で有名だった干宝撰かんぼうしん、と言われる『搜神記』卷十四に載せられて  
いる二つの「羽衣人」の話をご紹介します（ご存じの向きも多いことだろうが）。申すまでもなく『搜神記』は——  
干宝撰にあらずとも——西暦四世紀に属する魏・晋・南北朝の志怪小説中最も重要な作品である由。なお、以下訳  
文および注記中での「」内は論者の補足。

先ず記すのは、男性（であろう、多分。人間の男性を性的に犯して、これを妊娠させるのだから）の羽衣人に関  
わるなんとも奇怪な物語である。二番目の羽衣人譚とは筋上ほとんど脈絡が無いが、触れるだけは触れておかない  
と、気が休まらない。それにあえて言挙げする理由がないでもない。

原文<sup>(2)</sup> (旧字は新字に変えた)。

元帝永昌中、暨陽人任谷、因耕、息於樹下、忽有一人着羽衣就淫之、既而不知所在。谷遂有妊。積月、将産、羽衣人復来、以刀穿其陰下、出一蛇子、便去。谷遂成宦者、詣闕自陳、留於宮中。

読み下し文にしてみる (分かり易いよう句読点を改めた箇所がある)。

元帝<sup>げんてい</sup>の永昌<sup>えいしょう</sup>年中、暨陽<sup>きやうよう</sup>の人任谷<sup>じんこく</sup>、耕<sup>こう</sup>するに因<sup>よ</sup>り、樹下<sup>じゆか</sup>に息<sup>い</sup>う。忽<sup>たち</sup>ち一人の羽衣<sup>うい</sup>を着くる有りて、就<sup>つ</sup>きて之<sup>これ</sup>を淫<sup>いん</sup>し、既<sup>い</sup>にして所在<sup>そんざい</sup>を知らず。谷遂<sup>つひ</sup>に妊<sup>はら</sup>める有り。月<sup>つき</sup>を積<sup>か</sup>ね、将<sup>まさ</sup>に産<sup>う</sup>まれんとす。羽衣<sup>うい</sup>の人復来<sup>また</sup>たり、刀<sup>とう</sup>を以<sup>も</sup>て其<sup>そ</sup>の陰<sup>いん</sup>下<sup>か</sup>を穿<sup>う</sup>ち、一蛇子<sup>いっせし</sup>を出<sup>い</sup>だして、便<sup>すなわ</sup>ち去<sup>く</sup>る。谷遂<sup>つひ</sup>に宦者<sup>かんじや</sup>と成<sup>な</sup>り、闕<sup>けつ</sup>に詣<sup>も</sup>つて自<sup>みづか</sup>ら陳<sup>ちん</sup>じ、宮中<sup>きゆうちゆう</sup>に留<sup>とど</sup>まれり。

現代語訳を試みる<sup>(3)</sup>。

元帝<sup>(4)</sup>の永昌年間〔三三二。元帝治世二一年目の最後の年〕のこと、暨陽〔現江蘇省江陰市〕の人任谷が、耕作の折、樹の下で休息した。そこへ不意に羽衣を纏った者が出現、近づいて来て、谷と交わったかと思うと、どこかへ行ってしまった。谷は懐妊してしまい、月数が経って、出産寸前となった。すると羽衣の者がまたやって来て、刃物で谷の陰部を切り開き、一匹の蛇の子を出すと、たちちになくなった。谷は結局去勢されたわけなので、宮廷<sup>(5)</sup>に参上して自分から事情を述べ、宮中に留まっ〔て宦官<sup>かんがん</sup>として使ってもらっ〕た。

ちなみにこの逸話は遙か後世、明の謝肇淪の考証隨筆『五雜俎』（『五雜俎』とも）巻五にも記されている。博覽強記の南方熊楠は「婦女を姦童に代用せしこと」（<sup>6</sup>）（振り仮名は論者）なる一文で、男子が子を産んだ例として『五雜俎』から引用。

男色行為の対象にされた者が妊娠するしだい——いやはや——も類例が甚だ少ないが、男子が帝王切開のごとく手術されて、蛇の子を生んだ、というのは、これに増すこと更に数等、なんとも珍妙である。（『搜神記』が実際に干宝の手に成ったとしてのことだが）干宝が殊更にこれを録したのは、同時代人でしかも高級官僚として、単なる伝聞・風評ではなく、なんとか裏付けし得る立場にあったからかも知れない。とは申せ、生活に困窮して自ら闖入となった（遙か後代ではあるが清朝の宦官志願者にはこうした人人が少なくなかったとか）か、あるいは事故などで陰部を損傷した結果そうなったかした男が、かように奇怪な話を捏造して、皇帝の後宮の召使として就職することになった、という身も蓋もない解釈も成立しよう。ただしこの話を大真面目に受けて分析するとすれば、何だか分からないことが多い。「羽衣人」とは道士などが着けたという鶴氅（＝鶴の羽で織った着物）を着た仙人の類か、あるいは、鳥のように飛翔できる衣を纏って空からひらりと舞い降りて来た天人の類か。もともと、空から降りた、とは一言半句も記されていないが。任谷は物語にあるような危害を加えられても創口などは簡単に治癒したのだろうか。去勢は陰莖も陰囊も取り去る酸鼻なやりかただったのだろうか。生まれた「一蛇子」のその後はどうなったのか。疑問は次次に起こる。更に申せば、参内して「自陳」する、という大胆なことを敢行したにしても、官がこのような庶人の陳情を受ける場合、しかるべく官に属する者が下から上へ手続きを取らねばならなかったはず。下はこの男の居住する村の里正から上は宮廷の宦官の長に至るまで、根も葉もない嘘八百を真に受ける可能性は極めて稀少だろう。してみると——繰り返すが、『搜神記』が実際に干宝撰であるととして——やはり干宝が、こ

の顛末実証なり、と納得するだけの諸根拠が揃っていたのだらうか。<sup>(8)</sup>

ともあれ、このような話を小論の枕に振った所以は、「羽衣人」が、先に触れたように、鶴氅を着た仙人の類ではなく、それを道具とする鳥のように、あるいは鳥さながらの形状になって空を飛べる「羽衣」を纏い、魔界あるいはその他の異界から到来した者であるとすれば、これは「白鳥男子」なる存在で、（おそらく）世界に類例を見ないからである。異郷の住人が人間の女性と通婚する異類婚姻譚は枚挙に暇ないが、これらの男性ないし牡の異類は「羽衣」を纏うことはない。つまり、「羽衣」を纏う者は任谷の妙ちきりんな一件を別とすれば（これもまた、おそらくだが）全て女性であつて、女性でないとうとうにも不自然なのだ。では、なぜ不自然なのだらう。今のところ論者には少なくとも自らを説得できるような仮説が得られない。大方のご高教を戴ければ幸いである。

次に記すのが世界的に流布している周知の「羽衣」物語、言葉を換えれば、「白鳥乙女」swan maiden（中国で言う「天鵝処女」）説話で、本論の主題。文献となつていゝものではこれが世界最古である。

原文<sup>(9)</sup>（旧字は新字に変えた）。

予章新喻異男子、見田中有六七女、皆衣毛衣、不知是鳥。匍匐往得其一女所解毛衣、取藏之、即往就諸鳥、諸鳥各飛去、一鳥獨不得去。男子取以為婦。生三女。其母後使女問父、知衣在積稻下、得之、衣而飛去、後復以迎三女、女亦得飛去。

読み下し文にしてみる（分かり易いよう句読点を改めた箇所がある）。

予章新諭県の男子、田中に六七女の有りて、皆毛衣を衣くるを見る。是れ鳥なるを知らず。匍匐して往き其の  
 一女の解く所の毛衣を得、取りて之を蔵す。即ち往きて諸鳥に就くに、諸鳥各飛び去り、一鳥独り去ることを  
 得ず。男子取りて以て婦と為す。三女を生す。其の母後に女をして父に問わしめ、衣の積稲下に在るを知りて、  
 之を得、衣けて而て飛び去れり。後に復以て三女を迎え、女亦飛び去るを得る。

現代語訳を試みる。

予章郡（現在の南昌。江西省南東）新諭県（現新余県）のある男だが、田の中に六七人の女がいて、羽の衣を纏っ  
 ているのを見た。鳥なのか人間なのか見当がつかない。這って行って一人の女が脱ぎ捨てた羽の衣を盗み取り、匿  
 してしまつた。それからすぐさま鳥たちに近づくと、鳥たちはそれぞれ飛び去つたが、一羽の鳥だけは「人間の姿  
 のままなので」逃げる事ができないでいた。男はこれを捉えて妻とした。やがて三人の娘が生まれた。後に娘た  
 ちの母は娘たちに言いつけて父に「羽の衣の在処を」質問させ、衣が「倉に」積み重ねてある稲束の下にあるのを  
 知り、これを手に入れ、それを纏つて飛び去つた。後にまた三人の娘を迎えにやつて来て、娘たちも「鳥の姿に  
 なつて」飛び去ることができた。

羽衣を纏つた姿で田に降りていた女たちは、一体何をしていたのであろう。羽衣を脱いでいたのは一人だけだ

し、田圃たんぼであつてみれば、よしんば水が張られていたにせよそこで沐浴し得たとも思えない。水を乾された稲の刈り跡でいかにも鳥らしく落穂でも啄つばんでいたのだろうか。鳥になつて去る手段である羽衣を男に奪われて匿され、三人の娘まで生なした鳥女房が、娘たちを使って羽衣の在処を夫から訊き出すのは類話にも見られるモチーフである。子どもらを迎え取りに来たのは、男の子ではなく女の子だったからだろうか（息子は夫の家に属す）。娘たち用に羽衣を三着持参したのでらう。それにしてもいろいろ不明なところのある話である。

なお、宋の太宗皇帝の勅命により太平興国二年（九七七）李昉りほう等が漢代から宋の直前の五代までの小説・伝奇を集め、項目別に編纂した『太平広記』（五百巻）ではこの話が「新喻男子」と題されて、卷四百六十三「禽鳥類四十四」に類別されている。けれどもこの項目では他に類話はない。

さて、右は人間の男性が無理強いに異類の女性を妻にした話だが、これとは反対に、異類の女性が自ら進んで人間の男性の妻となり、大きな恩恵をもたらしてくれる話が、やはり『搜神記』巻一にある。すなわち日本民話「鶴女房」型である。念のためこれをも紹介して、また、「羽衣」型の解説に戻ることしよう。

原文<sup>(3)</sup>（旧字は新字に変えた）。

漢董永、千乘人。少偏孤、与父居肆、力田歆、鹿車自隨。父亡、無以葬、乃自売為奴、以供喪事。主人知其賢、与錢一万、遺之。永行、三年喪畢、欲還主人、供其奴職。道逢一婦人曰：「願為子妻。」遂与之俱。主人謂永曰：「以錢与君矣。」永曰：「蒙君之惠、父喪收蔵、永雖小人、必欲服勤致力、以報厚德。」主曰：「婦人何能？」永曰：「能織」。主曰：「必爾者、但令君婦為我織纈百疋。」於是永妻為主人家織、十日而畢。女出門、謂永曰：「我、天之織女

也。縁君至孝，天帝令我助償債耳。」語畢，凌空而去，不知所存。

読み下し文にしてみる（分かり易いよう句読点を改めた箇所がある）。

漢の董永は千乗せんじょうの人なり。少くして偏狐へんことなり、父と肆しに居り、田畝でんぼに力め、鹿車ろくしゃして自ら随したがう。父亡じ、以て葬むする無し。乃ち自ら売うりて奴やつと為し、以て喪事そうじに供す。主人其の賢なるを知り、錢一せん万まんを与え、之これを遺つかわす。永行きて、三年の喪畢もあひり、主人に還かへり、其の奴の職に供せんと欲す。道に逢える一婦人の曰く「願わくは子の妻と為らん」と。遂つひに之これと俱ともにす。主人永に謂いいて曰く「錢は以て君に与えたり」と。永曰く「君の恵みを蒙り、父の喪を収蔵せり。永小人しょうじんたりと雖も、必ず勤めに服し力を致し、以て厚德に報いんと欲す」と。主曰く「婦人何を能くするや」と。永曰く「能く織れり」と。主曰く「必爾ひつじなれば、但君の婦をして我が為に織けんひやくひき百疋を織らしめよ」と。是に於いて永の妻、主人家の為に織り、十日にして畢れり。女門かどを出でて、永に謂いて曰く「我は天の織女しよくじよなり。君の至孝しこうなるに縁りて、天帝我をして債つぐなを償たがうを助けしむるのみ」と。語畢り、空を凌いで去り、所在を知らず。

現代語訳を試みる。<sup>(14)</sup>

漢の董永は千乗〔現山東省〕の人である。少年の頃片親〔母親〕を失い、父と小さい町に住んで、農耕に励み、〔父が外出する時には〕小さい車こに乗せて供をするのであった。父が没したが、葬儀むすびを行う金が無い。そこで自分

で自分を売って奴隷となり、「その身代金みのしろぎんを」葬儀の経費に当てることにした。董永を買って主人となった人は、彼に徳行があるのを知り、一万錢（「十貫文」）を与え、家に帰してくれた。永は家に帰り、「親に対する喪礼である」三年間の喪に服したが、それが終わると、主人の許もとに戻り、奴隷として仕えよう、と思った。すると途中で出逢った一人の女性が「どうかお願いします。あなたの妻になりたいのです」と言うのだった。そこでとうとう同行することにした。主人は永に「あの錢はあなたに差し上げたものですよ。「ですから、わたしの家で奴隷となって奉公する必要はありません」と言ってくれた。永いわく「あなたのお恵みを戴きまして、父の葬儀万端をあい済ますことができました。永はつまらぬ者ではありませんが、なんとしても、諸事仰せに従い、一心に働き、戴いたご厚恩のお返しをいたしとう存じます」。主人が言うには「奥さんは何がおできかな」。永は答えた。「機織はたおりが上手です」。主人は言った。「まことにさようであれば、どうかわたしのため、縑絹かぢきぬ（「二本縑よりの糸で細かく織った絹布」）を百疋びひ、あなたの奥さんに織ってもらってください」。そこで永の妻は主人の家のために布を織り、十日で全部織り上げた。「織り上げると」女は屋敷の門を出て、永に向かってこう告げた。「私は天の織女なのです。あなたがとても孝行なので、天帝が命じて、私にあなたの身代金を返す手伝いをおさせになったのですわ」。言い終わると、空中に舞い上がっていなくなり、どこへ行ったかわからなくなった。

通常大人一人の着物を仕立てることができる布一反は二丈八尺（約一〇メートル）(18)だから、百疋、即ち八千尺の絹布は二百八十五余反分にもなる。加えてこの布地は仙女である織姫おひめが精魂籠めて織り上げたもの。身代金一萬文の優に百倍以上の値打ちがあったことだろう。架空の説話を相手にした、あくまでも現今の、それも日本での計算、というまことに埒も無い示唆ではあるが。



(二)

人間の男性が、超自然的存在、あるいは動物、そして類例は稀少だが植物の女性と結ばれて、子を儲けたという、民話ももちろん枚挙に暇がない。

超自然界から来た妻、ないし動・植物の妻の代表格はいわゆる「白鳥乙女」である。人間の男が水浴している乙女の羽衣（飛翔するのに必要な道具）を奪い、行き場を失って途方に暮れた乙女と結婚する。もつともすぐ羽衣を返却する話型もあり、その場合は、男は妻に彼女の父のもとに伴われて行き、様様の難題を課されるが、妻の援助でこれを解決する。次いで妻の親許から二人で手に手を取って脱出する魔術的逃走譚 *Magische Flucht* に結びつくこともあるが、いずれにせよ、人間の男と異類の妻は添い遂げることが少ない。（西欧の場合はこれと異なり、必ずと言ってよいほど、添い遂げる。これは西欧の場合、妻は真の異類ではなく元来は人間であり、魔法使いなどに呪われて人間とは違う形相をしているところを人間の若者に出逢い、これに妻とされ、一度夫の許から立ち去るものの、捜しに来た夫によって魔法の呪いから解放され、元の人間に戻るからである）。男が羽衣を匿しておいた場合、夫の留守中に羽衣を発見した妻がそれを纏って故郷である超自然界などへ帰ってしまったので、あとから男が恋い慕って行く、というものもある。これは世界的に存在し、「失踪した女房を探す男」という民話話型（A T U 四〇〇）の（3）に分類される。

日本の羽衣伝説はいうまでもなく白鳥乙女を妻にする型の一環である。古代の『駿河国風土記』の記事としては認められないそうだが、『本朝神社考』五によれば、三保の松原（有度浜）に降り立った神女が脱ぎ捨てた羽衣を見つけた漁師が、相手が懇願するにもかかわらず返さず、神女はせんかたなくこれと夫婦になるが、その後羽衣を取り戻し、雲に乗って去った、とある。ところで、古代の『近江国風土記』とは決し難い由ではあるが、『帝王編

年記<sup>(24)</sup>の「伊香の郡の小江」の説話は、男が天女の羽衣を盗み天女を留め置く点、天女を妻として子を儲ける点、天女がやがて羽衣を捜し出し、これを纏って天に帰る点、典型的な「白鳥乙女」譚である。十四世紀成立とされる『帝王編年記』所収の記事とはいえ、もし『近江国風土記』がこの記事の原資料であるとすれば、この説話の日本における最古の文献だった、と申せよう。以下にこの説話の意訳を示す。

古を知る老人がかように伝えている。近江の国（滋賀県）伊香の郡に余呉なる里がある。伊香の小湖（余呉湖）はこの里の南に位置する。天界の八人の女性が皆白鳥の姿になり、天から降り、湖の南の浦で沐浴をした。たまたま伊香刀美という男が西の山にいて遠くからこの白鳥たちを眺めたところ、なんともその形が奇異である。それゆえ、もしや神女ではあるまいか、と思い、近くまで赴いて見ると、いかにも神女だった。伊香刀美はすぐさま慕わしくて堪らなくなり、なんとしてもそこを立ち去ることができないまま、こっそり白い犬を遣わして、天の羽衣を盗み取らせると、「八人の神女姉妹のうち」末の妹の衣が入ったので、これを隠した。そこで天女（天界の乙女）たちは「様子がおかしいのを」悟り、姉たち七人は天上へ飛び昇ったが、末の妹一人は飛び去ることができない。天上へ帰れないまま、この地上の人となった。天女たちが沐浴した浦は、今「神の浦」と呼ばれるところである。伊香刀美は天女の末妹と夫婦になってこの浦に住み、とうとう男女の子たちをもうけた。男二人、女二人である。兄の名は意美志留、弟の名は那志登美、娘はいえば、伊是理比咩、それから奈是理比売で、伊香連らの先祖はこれである。のちに（この子どもたちの）母親は天の羽衣を捜し出し、これを纏って天に昇った。伊香刀美は独り取り残されて、悲しく嘆き続けた。

ちなみに、『常陸国風土記』「香島郡」の「白鳥の里」に纏わる伝承は、白鳥が飛来して乙女となり、夕べには天に帰り、朝はまた降り、石を積み上げて水を堰き止めて池を作ろうとした、とのもので、異類婚とは関係ない。また、『丹後国風土記』（逸文）にある「丹波郡」の「比治の里」の伝承および「奈良社」の縁起は、老夫婦が天女の羽衣を奪って無理に養女とし、この養女の酒を醸す伎倆で大層豊かになると、非道にも天女を追い出す、というもので、民話として考えると含蓄があるが、これまた異類婚と関係なからう。

しかし、右に挙げた羽衣伝説や、これも日本のものである「鶴女房」や「信田狐」で分かるように、日本では夫がいなくなった妻を慕って探しに行くことがほとんどない、いなくなつて終わり、という物語は、ヨーロッパの口承文芸研究者にとっては、それでいいのか、と甚だ奇妙に思われるのである。ただし、例外が一つある。日本民話「天人女房」は天に帰つた妻を求めて、妻に教えられた方法で夫が天に昇る。管見では他には思いつかない。つらつら思うに、日本人の男性は妻が異類であることがよくよく明らかになると、諦めてしまうのではないだろうか。「諦む」は「明らむ」から来ているのかも知れない。その証左となるのは、『今昔物語集』本朝世俗部卷第三十第十四「人の妻化して弓となり、後に鳥となりて飛び失せし語」である。この夫は鳥になつた妻を一旦追跡する。けれども、鳥になつた妻がまた「人」に戻つたのに、そこから引き返してしまふのだ。

これはこんな奇妙な話。以下に大意を示す。

美しい妻と仲良く暮らしている男があつた。妻と共寝をしていたある時、男は夢で妻がこう語るのを聴く。「一緒に暮らしておりますが、私は俄に遠いところに行くことになりました。もうお目に掛かれません。でも私の形見を残して参りましょう。それを私の代わりに大切になさってくださいまし」と。夢から覚めると枕元に

弓が立っていた。男はこの弓を朝な夕なにいとおしんでいたが、数箇月経つと弓は白い鳥になって飛び上がり、遙か南を指して行つた。男が跡を追うと、紀伊国に着いた。そこで鳥はまた人となった。男は「こういうしだいであつてみれば、「妻は」この世の存在ではなかったのだ」と思い、そこから引き返した。

あるいは、いつの日にか再び自分の許に帰つて来るかも知れない、と愛しい妻を待ち続けるしおらしい男心とも考えられる。北欧でも、いわゆる「古エツダ」の「ヴェルンドの歌」<sup>(29)</sup>にある、ヴァルキユールである白鳥乙女を妻としたフィン王の三人の王子たちのうち鍛冶の伎倆に長じた末弟ヴェルンドは、宝石を鏤めた黄金の腕環を夥しく鍛えながら、八年の夫婦暮らしのあと九年目に去つて行つたアルヴィトをひたすら待つ。二人の兄たちはいずれも妻を捜しに出るのだが。

さて、失踪した恋女房を探しに行く、というモテイフを素材として興味津津たる物語に仕立て上げたものとしては、グリム兄弟の先駆者の一人、十八世紀の文人J・K・A・ムゼーウスの「奪われた面紗」<sup>(30)</sup>や、中近東の一大説話集成『千夜一夜物語』<sup>アルフライワラウイラ</sup>の「パツソラーのハッサン」<sup>(31)</sup>がある。

アメリカのフィンランド学派の口承文芸研究者ステイス・トンブソンの『民間説話』には、「女房が鳥になって夫の留守に去るが、夫に謎の言葉を残して自分の居所を解かせる、という形になっているものもある」と記されている。たとえば、パウル・ツァウネルト編『グリム以降のドイツ昔話』<sup>(32)</sup>「一番「獵師と白鳥乙女」<sup>(33)</sup>では、数年の結婚生活のち羽衣を見つけ出して、これを纏った白鳥乙女は、夫（乙女の羽衣を奪つて乙女を妻とした若い獵師）の母（「姑」）に向かい、こう言つて飛び立つ。

「母様。私にまた逢いたいという人はガラスのお山に来なくてはなりません。そのお山は広いひろい原っぱにあるのです。私は魔法にかけられた王女で、そこへもどらなければいけないのです。いとしいだんな様とかわい子子どもたちによろしく言ってくださいませ。それではご機嫌よろしゅう」。

「信田妻」として説教節や浄瑠璃、また歌舞伎の「芦屋道満大内鑑」で有名な狐女房葛葉は、ふと昼寝をした折、人間の男（安倍保名）との間に設けた子の童子丸（のちの安倍晴明）に本性を見られて（坊や驚いていわく「あれ、母さんの顔がわんわんに成りつるは」）去る。その際、泣く泣く鏡文字で障子に書く（舞台の障子の向こうで狐役の役者が筆を揮い、障子のこちら側の観客はこれを普通の字として読む）「恋しくば尋ね来てみよ和泉なる信田森のうらみ葛葉」は、「獵師と白鳥乙女」の夫へのメッセージとびったり符節が合うからおもしろい（芝居では、夫だった安倍保名は息子とともに信田森へ赴き、妻とした白狐に逢い、贈り物を貰う）。

日本民話「天人女房」でも「飛びぎぬ」（羽衣）を見つけた天女は（残された夫が必ず使うはずの）火吹き竹に、こうすれば天に登れる、という方法を記した紙片を詰め込んでから、天へ飛び去る。

近世ヨーロッパのメルヒェンの場合、動物あるいは植物の姿で人間の男性に接近し、やがてはこれと結婚する女性、魔法にかけられているか、自ら魔法で変身しているかで、元来は人間であることが多い。『グリム兄弟の家庭と子どものための昔話集』*Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm*（略称 KHM）でこれに該当する話には、KHM 六三「三枚の羽」Die drei Federn、KHM 一〇六「哀れな粉挽きの若い衆と小猫」Der arme Müllerbursch und das Käzchen、KHM 一六〇「謎々話」Die Rätselmärchen の三話か。もともと「三枚の羽」では、地下の国に棲む蟾蜍姿の一族の中の小さい蛙が抜け作王子のお嫁になるが、これはもしかすると、本物の

蛙が美女に化けたのかも知れない。インドには蛙の女王が美姫に変身、通りかかった王をたぶらかしてこれの妃に納まるが、王は妃の素性を知っても幸せである。(38) こうしたオリエントの物語がヨーロッパに流入した可能性は否定できない。しかし、狩猟・漁撈(ぎょらう)によって生活する人人においては、キリスト教化されたあとのヨーロッパ人であっても、動物の女性と人間の男性の通婚は不自然とは考えられなかったようだ。北欧やスコットランドでは「海豹(あひす)乙女」が民話に登場するので。また、北極圏に住むイヌイットの間では「鴨乙女」が語られている。S・トンプソンは動物女房と動物婿について、北米先住民やイヌイットの数数の民話を挙げ、「世界各地の未開民族の話にあつては、人間が実際の動物と結婚するといった例は枚挙に暇がないくらいである」と述べている。(39) けれども、人間と動物との間にはつきりと隔てを設けるキリスト教の教義に基づかない宗教観を持つなら、未開民族ならずともこの種の話の例が夥しく見られることはここで断るまでもない。ただ、この場合でも、動物婿には禁忌感が働き、動物女房は歓迎すべき存在とされている、と大雑把ではあるが概観されよう。

さて前記葛葉狐は良妻賢母(こうした表現を用いると、現代日本では、時代錯誤(アノケロニズム)の譏り(せじ)を免れまいが)である上、女の性(さが)の哀しさを具現して人間の、少なくとも人間の男どもの琴線に触れるのだが、この種のいとおしい女性が日本の異類女房のほとんどを占めていることは、指摘しておくだけの価値があると思う。上は木下順二の民話劇や團伊玖磨作曲のオペラの美しくも哀しいおつうで有名な「鶴女房」(40)(本来の民話では、鶴は必ずしも鶴を助けた人間の女房になるのではないが)から、下はいささか穢(せむ)い感はあるが料理上手の「蛤女房」(41)(通常夫に供する汁がすこぶる美味。これは鍋に跨(また)つて我と我が身の貝のエキスを入っていたためだが。それを目撃した夫に、小便を垂れた、と誤解されて追い出され、大蛤の姿に戻る。この蛤、自分を捕まえた人間が放してくれたので、わざわざその妻となって恩?に報いたのである。やれ、せつなきことよ)に至るまで、異類の妻は人間の夫にとって甲斐甲斐

しい世話女房であり、かつ、愛らしさを失わない。本来人間の生命をあつさり冷たく奪つてのけるはずの雪女でさえ、何年か睦まじく暮らしたあとでは、あの吹雪の一夜のことをしゃべるな、という禁忌を破つた夫を、約束通り取り殺すことができずに去るのである。これまた恐ろしいはずの龍や蛇も、人間の妻となつてからは、夫や子どもに危害を加えることは決して無い（とは申すものの、小論で最後に取り上げる「虎乙女」の一話では異なるが）。

中国ではどうか。人間の女性に化けた狐の本領は、かの国の伝奇小説である明末の人馮夢龍増補の四十回本『北宋三遂平妖伝』<sup>(43)</sup>に登場する小狐胡媚兒の艶っぽい挿話（第十五回）でも大いに發揮されているが、とりわけおそらくいのは清の蒲松齡著すところの『聊齋志異』<sup>(44)</sup>に収められた種種の物語である。これらで活躍する胡氏（狐は人間に化ける時「狐」と音の共通する「胡」を姓として名乗るのがお約束）の美人の中には文字通り狐媚をふりまくだけの軽佻な連中ももとより少なくないが、なまじつかな人間以上に男に尽くす例も二三に留まらない。「狐夢」、「青鳳」、「青梅」、「胡四姐」、「荷花三娘子」などなど。また、明代の擬話本「三言二拍」百九十八編のうち第一の傑作とされる『警世通言』第二十八卷「白娘子永鎮雷峰塔（白娘子永に雷峰塔に鎮まる）」の女主人公白夫人（白蛇の精）は美青年の許宣を見初め、術を用いてこれと夫婦になるが、ひたすら夫を大切にしている。結びで法海禪師なる僧侶が白夫人と侍女の青青（青魚の精。従順で可愛らしい）を鉢の内に呪封してしまい、許宣は出家するが、論者には、法海坊主め、余計なお節介をやりおつて、としか思えない。なお、この作品は「或いは馮夢龍の創作かも知れない」とのこと。<sup>(45)</sup>

### (三)

ただし、中国でも「虎乙女」となると話はいくらか別なようだ。『原化記』、『集異記』、『河東記』（いずれも既に

湮滅いんめつしているが、前掲宋の李昉等撰『太平広記』にそれぞれを出典として下記のごとき話が収録されている）には、虎が皮衣を脱ぎ捨てて美女となったのを、人間の男が娶り、子どもらも授かるが、その後ある折に昔日の虎皮を纏った妻は、猛虎の姿に戻って自然界に去る。ここまではよい。「白鳥乙女」と同工異曲である。しかし、『集異記』では虎身に還かえった女は、夫と息子を喰い殺してしまう。『原化記』と『河東記』では夫、子どもたちは無事であるものの、『河東記』のそれは民話ではなく洗練された短編小説の趣があるので、論者としては単純な類型として『原化記』の話のみを採りたいのはやまやまなのだが、全体を比較・考量することによってさまざまな問題が浮かび上がって来ることも確かである。もともと『河東記』の虎夫人は、民話の異類妻のお約束通り理想的な配偶者である（その上——民話ではまず言及されないことだが——教養・品格共に高い）。

『原化記』は、男が、眠っている乙女から虎の皮衣を奪って隠してしまい、乙女を無理やり妻にするところ、妻は、子どもが何人もできてから、皮衣を着て元の姿にもどり、どこかへ去ってしまうところ、「白鳥乙女」説話の典型である。男に特定の固有名詞があてがわれていないのも民話に相応しい。以下にこれを紹介する。

原文<sup>(48)</sup>（旧字は新字に変えた）。

#### 天宝藏人

天宝年中。有選人入京。路行日暮。投一村僧房求宿。僧不在。時已昏黑。他去不得。遂就榻假宿。鞍馬置于別室。遲明將發。偶巡行院内。至院後破屋中。忽見一女子。年十七八。容色甚麗。蓋虎皮熟寢之次。此人乃徐行掣虎皮藏之。女子覺。甚驚懼。因而為妻。問其所以。乃言逃難至此藏伏。去家已遠。載之別乘赴選。選既就。又与同之官。



数年秩滿。生子数人。一日俱行。復至前宿処。僧有在者延納而宿。明日未發間。因笑語妻曰。君豈不記余与君初相見処耶。妻怒曰。某本非人類。偶爾為君所収。有子数人。能不見嫌。敢且同処。今如見恥。豈徒為語耳。還我故衣。從我所適。此人方謝以過言。然妻怒不已。策故衣軼急。此人度不可制。乃曰。君衣在北屋間。自往取。女人大怒。目如電光。猖狂入北屋間。尋覓虎皮。披之於体。跳躍数歩。已成巨虎。咆哮回顧。望林而往。此人驚懼。収子而行。

読み下しにしてみる（分かり易いよう句読点を改めた箇所がある）。

てんぼう  
天寶の選人

天寶年中、選人の入京する有り。路行して日暮る。一村の僧房に投じて宿を求む。僧在らず。時已に昏黒、他に去ることを得ず。遂に榻に就きて仮宿す。鞍馬は別室に置く。遲明將に発せんとし、偶院内を巡行す。院後の破屋中に至り、忽ち一女子を見る。年十七八。容色甚だ麗し。虎皮を蓋いて熟寢之次る。此の人乃ち徐ろに行き虎皮を擧きて之を蔵す。女子覺む。甚だ驚き懼る。因りて妻と為し、其の所以を問う。乃ち難を逃れて此に至り、蔵れ伏す。家を去ること已に遠し、と言う。之を別乘に載せて選に赴く。選既に就る。又与同之官たり。数年にして秩滿つ。子を生ずこと数人。一日俱に行く。復前に宿れる処に至る。僧の在る者有りて延納するに宿す。明日未だ發せざるの間、笑いに因りて妻に語りて曰く。君豈余と君と初めて相見ゆる処を記さざる耶、と。妻怒りて曰く。某本人の類に非ず。偶ただ君の収むる所となるのみ。子有ること数人。能く嫌われざらんと、敢て且く処を同じうす。今にして恥かしめらる。豈徒らに語と為さん耳。我が故衣を還せ。我適く所に従わん、と。此の

人方に謝するに過言を以てす。然れども妻怒りて已まず。故衣を策むること転急なり。此の人制すべからざるを度り、乃ち曰く。君の衣は北屋の間に在り。自ら往きて取れ、と。女人大いに怒り、目は電光の如く、猖狂して北屋の間に入る。虎皮を尋ね覓め、之を体に披り、跳躍すること数歩、已にして巨虎と成る。哮吼して回顧し、林を望みて去る。此の人驚き懼れ、子を収めて行けり。

意識すればこうもあろうか。

### 天宝の科挙受験生

唐の天宝年中〔七四二―七五五〕、科挙〔官吏登用試験〕を受験しようとする者があつた。途中日が暮れ、ある村の仏寺を訪ねて宿を求めたが、折悪しく僧侶が居合わさない。しかしもう真つ暗になってしまい、他の家に行くこともできない。そこで寝台に横になって仮寝をした。鞍置き馬は別室に入れた。夜明けがた出発しようとしたが、たまたま僧院内を歩き回つてみたところ、寺の背後にあら家があり、そこに一人の女がいるのに気づいた。年の頃は十七八で、すこぶる美人。虎の皮をかぶつて熟睡している〔おそらく全裸で寝ていたのである〕<sup>(50)</sup>。男はこつそり近づいて、虎の皮を奪い、これを匿した。乙女は目を覚まし、大層驚き恐れた。男は乙女を妻に〔つまり、無理やり性交〕してしまい、どうしてこんな所に居るのか訊くと、難を逃れてここまでまいりまして、ひっそり隠れております、生家はずっと遠方なのです、と言う。男は乗り換え馬に女を乗せ、科挙受験に赴いた。受験は成功、牧民に携わる地方官〔県尉＝県知事〕に任用された。数年して任期が満了したが、息子が数人できていた。一家うち連れて旅のある日、再び以前宿つた寺院に來た。今度は僧侶が居て、受け入れてくれたの

で、ここに宿った。翌日これから出発という時に、男は笑いながら妻にこう言った。私とそなたが初めて逢ったのはここだが、憶おぼえていないのかね、と。すると妻は怒こたって応えた。あたくしは元來人間ではないのです。たまたまあなたのものにされてしまったに過ぎません。息子が何人もできたので、嫌われないけない、と、しばらく一緒に居ただけですわ。今辱められたのは、ただことばの上だけではありません。あたくしにあの時の衣服を返してください。行きたいところに行きますから、と。男は、言い過ぎた、とひたすら謝まごったが、妻の怒りは一向収まらず、ますます激しくもとの衣服の返却を言い募もった。男は、これはどうしても止められないようだ、と考えて、こう言った。そなたの衣服は北の建物にある、自分で行って、取って来るがよろう、と。女は大いに怒り、目はきらきらと電光のように輝き、猛り狂って北の建物に入り、虎の皮を探し出すと、これを体に纏まとった。そして跳躍すること数歩で、巨大な虎になったのである。咆哮ほうこうしてちらりと振り返り、林を目指して行ってしまった。男は驚き恐れて息子たちを連れて立ち去った。

最後に「回顧した」(振り返った)のは、数年連れ添った男とお腹を痛めた子どもたちとに今生こせまの名残を惜しんだのだろう。

これは「誇りを傷つけられた異類の妻」の話である。我が子に正体が暴はれてしまい、それゆえ恥じ入った日本の「信田妻」もやはりその一つに入る、と考えてよからう。S・トンプソンは、北アメリカの大草原地帯の先住民諸部族に限定されている、としての民話「誇りを傷つけられた野牛女房」を紹介しゅうかいしている。

ある男が雌の野牛と結婚する。野牛は人間の女になって子を生む。男には人間の妻もいたが、その妻が野牛の

妻の身許を口に出している。あるいは他のやり方で彼女を怒らせる。野牛の妻とその子は野牛の姿に戻り仲間のところに帰る。夫は二人を探しに行く。野牛の長老は、野牛の群のなかから二人を選び出せば二人を男のもとに帰してやろう、という。野牛の子どもが合図の方法を前もって教えてくれたため無事二人を選び出して連れて帰る。

『集異記』にある「崔韜」では、虎の方から自薦して士人の妻になる。

原文<sup>(52)</sup>（旧字は新字に変えた）。

崔韜。蒲州人也。旅遊潞州。南抵歷陽。曉發潞州。至仁義館。宿館。吏曰。此館凶惡。幸無宿也。韜不聽。負笈昇庁。館吏備灯燭訖。而韜至二更。展衾方就寢。忽見館門有一大足如獸。俄然其門豁開。見一虎自門而入。韜驚走。於暗處潛伏視之。見獸於中庭脫去獸皮。見一女子奇麗嚴飾。昇庁而上。乃就韜衾。出問之曰。何故宿余衾而寢。韜適見汝為獸入來。何也。女子起請韜曰。願君子無所怪。妾父兄以畋獵為事。家貧。欲求良匹。無從自達。乃夜潛將虎皮為衣。知君子宿於是館。故欲託身。以備灑掃。前後資旅。皆自怖而殞。妾今夜幸逢達人。願察斯志。韜曰。誠如此意。願奉懽好。來日。韜取獸皮衣。棄庁後枯井中。乃挈女子而去。後韜明經擢第。任宣城。時韜妻及男將赴任。与俱行。月余。復宿仁義館。韜笑曰。此館乃与子始會之地也。韜往視井中獸皮衣。宛然如故。韜又笑謂其妻子曰。往日卿所着之衣猶在。妻曰。可令人取之。既得。妻笑謂韜曰。妾謂韜曰。妾試更着之。接衣在手。妻乃下階。將獸皮衣着之。纔畢。乃化為虎。跳蹲哮吼。奮而上庁。食子及韜而去。

読み下し（分かり易いよう句読点を改めた箇所がある）

崔韜は蒲州の人なり。旅して滁州に遊ぶ。南して歴陽に抵らんと、曉に滁州を発し、仁義の館に至る。館に宿す。吏の曰く。此の館凶悪なり。宿すること無からんことを幸う、と。韜聴かず。笈を負いて庁に昇る。館吏灯燭を備えて詫る。而して韜二更に至り、衾を展べて方に寝に就かんとす。忽ち館門に一大足の獸の如きの有るを見る。俄然其の門豁く開き、一虎の門自りして入るを見る。韜驚き走り、暗処に潜かに伏して之を視る。獸の中庭に獸皮を脱ぎ去るを見、一女子の奇麗嚴飾なるを見る。庁に昇りて上り、乃ち韜の衾に就く。出でて之に問いて曰く。何が故に余の衾に宿して寝ぬるや。韜適に汝の獸と為りて入り來たるを見たり。何ぞや、と。女子起ちて韜に請いて曰く。願わくは君子怪しむ所無かれ。妾の父兄毘狼を以て事と為し、家貧し。良匹を求めんと欲すれば、自ら達するよりなし。乃ち夜潜かに虎皮を將て衣と為し、君子の是の館に宿するを知れば、故に身を託し、以て灑掃に備えんと欲す。前後の賓旅、皆自ら怖れて殞せり。妾今夜幸いに達人に逢えり。願わくは斯の志を察せんことを、と。韜曰く、誠に此の意の如くんば、願わくは權好を奉ぜん、と。來日、韜獸皮の衣を取り、庁後の枯井中に棄て、乃ち女子を挈きて去る。後韜明經に擢第し、宣城に任ず。時に韜、妻及び男とともに將に任に赴かんとす。与に俱に行く。月余にして、復仁義の館に宿す。韜笑いて曰く。此の館は乃ち子と始めて会するの地なり、と。韜往きて井中を視るに獸皮の衣、宛然として故の如し。韜又笑いて其の妻子に謂いて曰く。往日卿の着する所の衣猶在り、と。妻曰く。人をして之を取らしむ可し、と。既に得たり。妻笑いて韜に謂いて曰く。妾試みに更に之を着せん、と。衣に接して在手す。妻乃ち階を下る。獸皮の衣を將いて之を着す。纔かにして畢る。乃ち化して虎と為る。跳び躡りて哮吼す。奮いて庁に上り、子及び韜を食らいて去れり。

意訳を試みる。

崔韜という男は蒲州〔現山西省〕生まれである。滁州〔現安徽省〕に遊歴し、更に南方の歴陽〔現安徽省〕に行くと、明け方に滁州を発つて、仁義〔現安徽省巢湖市廬江県仁義〕という宿駅(35)に到着、駅館に泊まろうとした。すると駅の吏員は、この建物には忌まわしい評判が立っており、泊まらない方がよろしゅうございます、と制止した。崔韜は聴き入れず、「書物などを運ぶ竹製の」背負い籠(36)を担い、階段を昇つて宿の表座敷に上がった。吏員は已むを得ず灯火の仕度をしたのである。二更〔午後十時ごろ〕になり韜が夜着を拵(37)けて寝ようとした時、突然駅館の門に巨大な獣の片足のようなものが掛けられたのを見た。不意にその門がさっと開き、一頭の虎が門内に入り込んだのを目にした韜はびっくり仰天、「寝台から」逃げ走り、「灯火の届かない」暗い隅に身を伏せて様子を注視した。見ていると獣は〔門と表座敷の間の〕中庭で獣の皮を脱ぎ捨てた。と、珍しいほど美しく、かつ、さらびやかに装身具を飾った女性ではないか。この美女は階段を昇つて表座敷に上がり、韜の夜着に潜り込んだ。韜は姿を現し、どうしてわたしの夜着に入つて寝ようとするのだ。このわたしはたった今おまえが獣の姿で入つて来たのを目撃したばかりだ。これはどうしたことだ、と詰問(38)すると、女は寝台から起き出して、韜にこう懇願するのだった。旦那様、どうか妙な風にお考えにならないでくださいまし。うちの男たちは獵師が稼業(39)です、家が貧しゅうございますから、良縁を得ようと思ひますなら、自分で配偶を見つけたるほかはありません。そこでこの館に立派なお方がお泊りになることを知りますと、夜、こっそり虎の皮を纏(40)いまして、この身をお任せして妻となり、お身の回りのお世話をしたい、と参上いたしましたのでございますが、これまでお泊まりあそばした旅のお客様たちは、皆さん、怖がつて命を落とされました。でも今夜は嬉しいことに度量(41)の大きなお方に巡り合えましたわ。どうかあ

くしのこの思いをお察しくださいますよう、と。崔韜は、まことにそなたの言うようであれば、是非よしみを結びたいものだ、と承知した。そして翌日、虎の皮を駅館の裏の洞れ井戸に投げ込み、女を連れてそこを後にしたのである。のちに崔韜は明経科（＝唐代科挙の科目の一つ）に合格、宣城（現安徽省）の県知事として赴任することになった。この時に当たり韜は妻と息子を伴い、連れだつて任地への旅に出た。一箇月余り旅を重ね、再び仁義の駅に到着して泊まった。韜は笑つて、この駅館はそなたと初めて会つた場所だよ、と告げ、行つて井戸の中を覗くと獣の皮衣がそっくりそのまま有つて昔通りだつた。韜はまた笑つて妻と息子に向かつてこう語つた。以前そなたが着ていた皮衣がまだちゃんと有つたよ、と。妻いわく。だれかに取り出させましようよ、と。皮が手に入った。妻は笑つて韜に向かつて言う。あたくし、試しにもう一度着てみますわ、と。衣に近づいて手に持ち、表座敷から中庭へと階段を下りた。皮衣を取つて身に纏う。着し終つたかと思つと、ただちに虎に変身、跳躍し蹲り咆哮した。そしてぱつと表座敷に飛び上がると、息子と韜を喰つて姿を消した。

ちなみにこれは、次に記す、小説と申してもよろしい「申屠澄」より更に民話「白鳥乙女」の類型から隔たつてゐる。自薦はいささかおかしいのである（人間の男に何らかの恩を受け、その恩を返そうとして妻になる型の話もあるわけだが、この場合は該当しない）。しかし、中国の志怪小説に登場する狐や鬼の美女はしばしば自分から秀才、拳人など知識階級の青年に近づいて、これと情を交わすから、あるいはこの虎乙女もそれに倣つたのかも知れないが、皮衣を脱いだ状態で「嚴飾」もおかしい。裸体、あるいは、それに近い恰好のはず。加えて、乙女自身「家が貧しい」と言つているのに、装身具でできらびやかに身を飾つてゐるとは。夫と息子を食べてしまうのもどんなものか。愛すればこそそうしたので、人間界への未練を断つため、と論を立てても一向釈然としない。また、こ

ここでは異類の妻はなんら辱めを受けてはいない（そもそも輶との馴れ初めは、虎乙女が全て自ら積極的に画策した結果であって、無理に輶の意に従わされたのではない）。従って、かような状況で虎の妻が山林に帰るのは自分勝手過ぎる行為で、遺憾ながら同情できない。

こういう逸脱・例外があるにせよ、おおむね異類の妻の進退たるやまことに情緒纏綿<sup>てんめん</sup>、人間の夫と琴瑟相和<sup>きんじつ</sup>し、遂に去るに及んでも、夫は妻を慕って止まず、二人の間に生まれた子どもは（大抵できのよいこともあって）父に育<sup>はぐ</sup>まれ、無事に成人する。先に「信田狐」のところでも名を挙げたかの高名な陰陽師安部晴明<sup>あべのせいめい</sup>をめぐる伝説では、彼が狐を母としているから常人には及びもつかぬ通力の持ち主なのだ、と説明される点が肝要なのだ。

『河東記』にある「申屠澄」<sup>しんとちやう</sup>（「申屠」は中国では珍しい複姓）の話は文人の筆が濃密に入っており、民話の素朴単純から遠く離れている。ところが短編小説として極めておもしろいし、異類の妻が愛する夫や子どもらを棄てて自分の属していた世界に帰って行くのはなにゆえか、読者に納得させてくれるので、前二編と同様全体をご披露し、以て「虎乙女」の話を結ぶことにしよう。

原文<sup>(55)</sup>（旧字は新字に変えた）。

申屠澄者。貞元九年。自布衣調補濮州什邠尉。之官。至真符県東十里許遇風雪大寒。馬不能進。路旁茅舎中有烟火甚温煦・澄往就之。有老父嫗及処女環火而坐。其女年方十四五。雖蓬髮垢衣。而雪膚花臉。举止妍媚。父嫗見澄来。遽起曰。客衝雪寒甚。請前就火。澄坐良久。天色已晚。風雪不止。澄曰。西去県尚遠。請宿於此。父嫗曰。苟



不以蓬室為陋。敢不承命。澄遂解鞍。施衾幃焉。其女兒客。更從容靚飾。自帷箔間復出。而閑麗之態。尤倍昔時。有頃。嫗自外挈酒壺至。於火前煖飲。謂澄曰。以君冒寒。且進一杯。以禦凝冽。因揖讓曰。始自主人。翁即巡行。澄當婪尾。澄因曰。座上尚欠小娘子。父嫗皆笑曰。田舍家所育。豈可備賓主。女子即回眸斜睨曰。酒豈足貴。謂人不宜預飲也。母即牽裙。使坐於側。澄始欲探其所能。乃拳令以觀其意。澄執盞曰。請徵書語。意屬目前事。澄曰。厭厭夜飲。不醉無歸。女低鬟微笑曰。天色如此。婦亦何往哉。俄然巡至女。女復令曰。風雨如晦。鷄鳴不已。澄愕然歎曰。小娘子明慧如此。某幸未昏。敢請自媒如何。翁曰。某雖寒賤。亦嘗嬌保之。頗有過客。以金帛為問。某先不忍別。未許。不期貴客又欲援拾。豈敢惜。即以為託。澄遂修婚之禮。祛囊以遺之。嫗悉無所取。曰。但不棄寒賤。焉事資貨。明日。又謂澄曰。此孤遠無隣。又復湫隘〔隘〕の誤り。不足以久留。女既事人。便可行矣。又一日。咨嗟而別。澄乃以所乘馬戴之而行。既至官。俸祿甚薄。妻力以成其家。交結賓客。旬日之內。大獲名譽。而夫妻情義益浹。甚於厚親族。撫甥姪。泊僮僕廝養。無不歡心。後秩滿將婦。已生一男一女。又甚明慧。澄尤加敬焉。常作贈內詩一篇曰。一官慙梅福。三年愧孟光。此情何所喻。川上有鴛鴦。其妻終日唵諷。似默有和者。然未嘗出口。每謂澄曰。為婦之道。不可不知書。倘更作詩。反似嫗〔姬〕の誤りであるう。妾耳。澄罷官。即罄室婦秦。過利州。至嘉陵。江畔。臨泉藉草憇息。其妻忽悵然謂澄曰。前者見贈一篇。尋即有和。初不擬奉示。今遇此景物。不能終默之。乃吟曰。琴瑟情雖重。山林志自深。常憂時節變。辜負百年心。吟罷。潛然良久。若有慕焉。澄曰。詩則麗矣。然山林非弱質所思。倘憶賢尊。今則至矣。何用悲泣乎。人生因緣業相之事。皆由前定。後二十余日。復至妻本家。草舍依然。但不復有人矣。澄与其妻即止其舍。妻思慕之深。尽日涕泣。於壁角故衣之下。見一虎皮。塵埃積滿。妻見之。忽大笑曰。不知此物尚在耶。披之。即變為虎。哮吼攫攫。突門而去。澄驚走避之。攜二子尋其路。望林大哭數日。竟不知所之。

読み下し（分かり易いよう句読点を改めた箇所がある）。

申屠澄は、貞元九年布衣より調して濮州の什邠の尉に補す。官に之く。真符県の東十里許りに至り風雪大寒に遇う。馬進む能わず。路傍の茅舎中に烟火の甚だ温煦なる有り。澄往きて之に就くに、老父媪及び処女の火を環りて坐する有り。其の女年方に十四五。蓬髮垢衣たりと雖も、雪膚花臉、拳止妍媚たり。父媪澄の來たるを見て、遽に起ちて曰く。客雪を衝き寒さ甚だし。前みて火に就かんことを請う、と。澄坐すること良久し。天色已に晩れ、風雪止まず。澄曰く。西に県を去ること尚遠し。此に宿さんことを請う、と。父媪曰く。苟し蓬室を以て陋と為さずんば、敢て命を承けざらんや、と。澄遂に鞍を解く。衾幃を施す。其の女客に見えるに、更に從容として靚飾し、帷箔の間より復出ず。而して閑麗の態、昔時に尤倍す。有頃、媪外より酒壺を挈けて至り、火前に飲を煖め、澄に謂いて曰く。以えらく君寒を冒せり。且く一杯を進め、以て凝冽を禦がん、と。因りて揖讓して曰く。主人より始めよ、と。翁即ち行を巡らし、澄婪尾に当たる。澄因りて曰く。座上尚小娘子を欠く、と。父媪皆笑いて曰く。田舎家に育つ所なり。豈賓主に備うるべけんや。女子即ち眸を回らし斜めに睨みて曰く。酒豈貴とし、人飲むに与るべからざらん、と謂わんや、と。母即ち裙を牽きて、側に坐さしむ。澄始め其の能くする所を探らんと欲し、乃ち令を挙げて以て其の意を觀る。澄盞を執りて曰く。書語を徵することを請う。意目前の事に属さんことを、と。澄曰く。厭厭として夜に飲み、酔わずして帰ること無し、と。女鬢を低れ微笑して曰く。天色此くの如し。帰るに亦何くに往かん哉、と。俄然巡りて女に至る。女復令して曰く。風雨晦きが如し、鷄鳴已まず、と。澄愕然として歎じて曰く。小娘子の明慧なること此くの如し。某幸いにして未だ昏らず。敢て自媿を請うこと如何、と。翁曰く。某寒賤なりと雖も、亦嘗て之を嬌保す。頗る過客有り。金帛を以て問と為す。某先に

別るるに忍びずして、未だ許さざりき。期せずして貴客又援拾せんと欲す。豈敢て惜まんや。即ち以て託と為さん、と。澄遂に婿の礼を修め、袂囊以て之を遺る。嫗悉く取る所無くして、曰く。但寒賤を棄てざるに、焉くんぞ資貨を事とせん、と。明日、又澄に謂いて曰く。此孤遠にして隣無し。又復湫隘なり。以て久しく留むるに足らず。女既に人に事う。便ち行くべし。又一日。咨嗟して別る。澄乃ち乗る所の馬を以て之を載せて行く。既にして官に至る。俸禄甚だ薄し。妻力めて以て其の家を成す。賓客と交結し、旬日の内にして、大いに名譽を獲たり。而して夫妻の情義益浹にして、甚だ親族に厚く、甥姪を撫し、僮僕厮養に泊び、歛心せざる無し。後秩満ちて將に帰せんとす。已に一男一女を生む。又甚だ明慧なり。澄尤も敬を加う。常て内に贈る詩一篇を作りて曰く。一官梅福に慙じ、三年孟光に愧ず。此の情何所にか喩えん。川の上に鴛鴦有り、と。其の妻終日唵諷し、黙して和する有るに似たり。然れども未だ嘗て口に出さず。毎に澄に謂いて曰く。婦の道為るや、書を知らざるべからず。倘し更に詩を作らば、反りて姬妾に似る耳、と。澄官を罷む。即ち罄室して秦に帰す。利州を過ぎて嘉陵に至る。江畔、泉に臨み草を藉きて憩息す。其の妻忽ち悵然として澄に謂いて曰く。前に一篇を贈らる。尋いで即ち和有り。初め奉示を擬せず。今此の景物に遇い、終に之を黙す能わず、と。乃ち吟じて曰く。琴瑟の情重しと雖も、山林の志自ら深し。常に憂う時節の変じ、百年の心に辜負するを、と。吟じ罷りて。漚然たること良久し。慕うところ有るが若し。澄曰く。詩則ち麗し。然れども山林は弱質の思う所に非ず。倘し賢尊を憶わば、今則ち至れり。何ぞ悲泣するを用いんや。人生因縁業相の事、皆前より定まれり、と。後二十余日。復妻の本家に至る。草舎依然たり。但し復人の有らず。澄と其の妻即ち其の舎に止まる。妻之を思慕すること深く、尽日涕泣す。壁角にある故衣の下に一虎皮見る。塵埃積満す。妻之を見るや、忽ち大いに笑いて曰く。此の物の尚在るを知らざりき、と。之を披るに、即ち變じて虎と為る。哮吼して拏攫す。門を突きて去る。澄驚き走りて之を避く。

二子を攜もへて其の路を尋ぬ。林に望み大いに哭なくすること数日。竟ついに之ゆく所を知らず。

意訳。

申屠澄は、貞元九年〔七九三〕無位無冠の身から拔擢(36)され、濮州〔現山東省濮県の東〕なる什邡県の知事になることになり、赴任した。真符県〔現陝西省洋県の北〕の東十里ほどのところでひどい吹雪と寒氣かんきに襲われた。馬が先へ進めないしまつである。街道沿いのみすばらしい茅葺き屋根の家の中で煙が上がっており、火がとても暖かそうに燃えているのが見えた。そこで澄がその家に近づく、年老いた夫婦と乙女が火の周りに坐っていた。乙女は年頃十四五歳か。ほうほうと乱れた髪、垢あかじみた着物ではあったが、雪のように白い肌、花のように愛らしい顔かほで、挙措きよそ動作は美しくなやかなのである。老夫婦は澄の来たのを見ると、さっと立ち上がり、こう言ってくれた。旅のお方、この雪の中をいらつしゃって、さぞまあお寒いことでしょう。どうか、お入りになって、火に当たってくださいまし、と。招きに応じた澄は暫く坐っていたが、もう暮れ方になり、吹雪は相変わらず止まない。そこで、これから西の県城〔Ⅱ県庁のある城市〕まで道のりはまだまだあります。どうかお宅に泊めて戴けませんかと頼んだ。老夫婦が言うよう。かようなあばらやではございますが、我慢してくださいさるなら、いかにもご用命に従いましょう、と。かくして澄は乗馬から鞍を下ろして、泊めてもらうことにしたのである。家の者は早速夜着を出してくれた。さてかの乙女は、客を迎えることになったので、ことさらゆつたりと化粧し、帷とばひの間から再び姿を現した。するとその雅やかで麗しい風情は、以前よりまた一段と優れていた。暫くして老母が外から酒壺(37)を下げて来て、火の傍で燂かをし、澄に向かって言った。あなた様、さぞお寒かったことでしょう。まずは一杯召し上が

れ。凍えたお体がほぐれまししょうから、と。澄は遠慮して、いやまずご主人から一献なさってください、と応じた。そこで老父から酒杯を巡らし、澄は〔酒席の〕末座を務めることになった。それから澄が、この席にはまだお嬢さんがおられません、と言つと、老夫婦は共に笑つて、何分にも田舎家育ち、とてもお客様の相手など、と答えた。これを耳にした乙女は眼差しを上げ、ちらりと横目を使つて、お酒の席つて気が置いてご一緒しにくいな、んてものではないでしょ、と応酬。そこで老母は娘の裙を引いて、傍に坐らせたのである。澄は最初乙女の才気のほどを探らうと思ひ、酒令を提案し、もつてその器量を看取ることにした。澄は酒杯を手にして言つた。しかるべき典籍から一句引用してください。題材は身の回りのことに限ります、と。澄いわく。厭厭として夜に飲み、酔わずして帰ること無し〔心長閑けく宵に飲む。酔わずに家へ帰るまじ〕、と。すると乙女は鬢髪を傾け、微笑んで言う。あら、お空がこんな風なのに、どうしてどこかへ帰れますの、と。やがて乙女に番が回ると、乙女がこのたびの酒令の句としていわく。風雨晦きが如し、鶏鳴已まず、〔雨風まるで夜みたい、雄鶏しきりに鳴いてます〕、と。

澄は愕然として感嘆し、〔老人夫妻に〕こう告げた。お嬢さんはなんとまあ聡明でいらつしやるんでしよう。わたくしには幸いにいまだ妻がおりません。仲立ちを介さないのは失礼ではありますが、求婚させて戴けないでしょうか、と。すると老父が言うには、わしは貧しく賤しい身ですが、この娘を大切に養つてきました。これまでですごぶる多くの旅人から豊かな婚資〔金帛。黄金と絹。金目の品〕を示しての申し込みがありました。さりながらわしはこれまで娘と別れるのが辛く、嫁ぐのを許しませんでしたのじゃ。が、凶らずもまたお客様が、娘を妻に、と望んでくださる。もうお断りはできません。娘をお任せいたしましたししょうぞ、と。かくして澄は婚としての儀式を行い、袖の財布を献じて婚資とした。老母は一切受け取らうとしないでいわく。別に貧乏暮らしを棄てようとするわ

けではないのですから、どうしてお金など戴けましよう、と。翌日になると、また澄に向かつてこう言った。ここは一軒家でご近所もなく、またまことに狭苦しゅうございます。ですから長らくのご逗留を願うこともできません。娘はもうあなた様に妻としてかしく身。さあ、お発ちになるのがよろしいわ、と。そういうしだい、更にもう一日が過ぎると、嘆息して別れたのである。

澄は自分が乗って来た馬に新妻を乗せ〔自分はその轡を執つ〕て行つた。かくして県知事に就任したが、その俸禄は甚だ薄い。しかし若夫人は一心に家政を司どつた。「一方澄は」訪れて来る教養ある人士と交わりを結び、十日もしないうちに、大いに名声を博した。その上澄夫妻の情義はいよいよ遍く、甚だ親族に厚く、甥や姪をよく可愛がり、従僕たちや、薪を採る男衆、厩の世話をするしもべらにまで及んだので、いずれも嬉しく思わぬ者はなかつたのである。その後任期が満了して帰省することになるまでに一男一女が生まれ、この子どもたちもまた甚だ聡明だつた。「こうしたことはなにもかも妻のお蔭だつたから」澄はより一層妻を敬つてやまなかつた。ある時のこと澄は妻に贈る詩一篇を作つた。即ち、

一官梅福に慙じ、  
官吏としてのこのわたしはあの梅福には及びもつかず、

三年孟光に愧ず。  
妻としてのそなたもかの孟光とまではまいるまい。

此の情何所にか喩えん。  
けれども我ら兩人の交情は喩えようもなく素晴らしい。

川の上に鴛鴦有り。  
そらね、川面には鴛鴦が仲良く泳いでいる。

妻は終日この詩を口ずさみ、胸の裡で唱和している風情だつた。だが、決して言葉には出さなかつた。「なぜなら」

日頃夫に対してこう述懐していた〔ので〕。妻の道としましては、読み書きができなくてはいけませんわね。でも、もしその上詩まで作ったりいたしますと、「正夫人ではなく」却かえつて側女そばめのように見えるだけです、と。さて澄は官吏を辞めることになった。そこで一家を挙げて「澄の生まれ故郷の」陝西省に帰ることにした。利州〔現四川省広元市の一部〕を過ぎて嘉陵〔川の名。西漢水と白水江とを合して成る。白水、巴水、渝水ともいう。四川省内の巨川〕に行き当たった。河畔の泉の傍で「車馬を下り」草を敷物代わりにして休息を取った。すると妻は急に憂わしい面持ちになり、澄に向かってこう語りかけた。以前、詩を一篇くださいましたわね。あのあとすぐに唱和の詩ができたのですが、それをご披露するつもりはありませんでした。でも今こうした景色に巡り逢いますと、もう申し上げないわけにはまいりませんわ、と。そうしてこんな詩を詠よんだのだった。

琴瑟の情重しと雖も、 　　あたくしたち夫婦の情は重いのですが、

山林の志自ら深し。 　　あたくしはどうしても山林に住みたくなってしまうのです。

常に憂う、時節の変じ、 　　今に何かが変わってしまい、

百年の心に辜負するを。 　　とこしえに、と想つてくださるあなたのお心に背くのでは、といつも心配でなりません。

詩を詠み終わると、しばしさめざめと涙を流し、いかにも慕わしげな様子である。澄は妻にこう言った。そなたの詩はなるほど美しい。けれども山林はそなたのようななやかな質たちの者の志す所ではないよ。もし、「山林に隠遁するひとの」賢さや尊さに憧れるということなら、そなたはもうそうした境地にあるではないか。どうして泣いて

悲しむことがある。人の世の因果応報なるものは、全て前から決まっているのだ、と。

それからまた二十余日旅を重ね、再び妻の故もとの家に着いた。茅葺きの小屋はちゃんと立っていたが、人の気配はない。澄とその妻はこの家に留まった。妻は父母を深く思い慕う様子で、一日中涙を流して泣いていた。

と、壁の一角に掛かっている古着の下から一枚の虎の皮が覗のぞき見えた。塵埃ちりほこりが一杯積もっている。妻はこれを見ると大笑いして言った。まあ、まだこれがあるなんて知らなかったわ、と。そして皮をはおるやいなや、変身して虎になり、咆哮ほうぼうしてがりがりとおがき、門に突進していなくなった。澄はびっくりして逃げ走ったが、やがて二人の子どもを連れて、妻の行った道を探り尋ね、数日の間林に向かい声を挙げて大いに嘆き悲しんだ。けれども妻の行方はとうとう分からなかった。

この「虎の皮」のことは前には記されていないのだから、物語を編んだ文人としては、この点用意が足りないように思われる。しかし、虎が人身を取り、また本相に戻る、というモチーフは、これまで述べて来たように、中国の説話世界にあつてはごく一般的である。従つて、作者・読者の双方がこのことを十分に了解していたから、作者は殊更伏線を張らなかつたのだ、とも解釈できようか。

民話を解釈する手法としては、ごくごく大雑把に言えば、民俗学的分析、心理学的分析、文芸論的分析の三つが挙げられよう。そして最後の分析はしばしば的外れに終わるきらいがある。さりながら、一度（この場合は自らの意志もあつて）人間の妻となつた可憐な虎乙女が、さして年を経ないのに、相思相愛の夫と大切な子息・息女を棄て去つて山林に逸走したわけは、ひとえに生まれ故郷（と両親・縁類）が恋しくて堪らなくなつたからだ、とするこの古代中国の一文人の示唆はまことに納得し得る。これはおそらく世界中の異類妻に当て嵌はまることで、民話の



文芸論的分析が正鵠を射ている珍しい例と申せよう。

最後に念のため一言。異類が男性、牡で、これが人間の女性と通婚する場合は全く様相が変わる。これについてはまた別に論じる他はない。

注

- 1 千宝 生没年未詳。字は令升、新蔡（現河南省新蔡）の人。東晋の歴史家、文学者。西晋（二六五—三二三）が滅びてから、江南に王朝を立てた琅琊王司馬睿、すなわち東晋——首都は健康（当初の名「建業」を首都と定めた時すぐ改めた。現安徽省の省都南京）——の元帝（在位三一七—三二二）の時召されて佐著作郎、次いで著作郎となる。その後家が貧しいため、求めて山陰の令となり、選って始安の太守となった。元帝から仲父と敬称された丞相王導（二七六—三三九。字は茂弘。琅琊臨沂（現山東省）の人）が請うて司徒右長史とし、選して散騎常侍とした。史官として『晋紀』二十卷を編んだ。これは良書とされたが、今は伝わらない。幼い時から学問に精励し、広く諸書を読み、生来陰陽術数や、迷信鬼神を好んでいたもので、古今の神怪靈異の事を撰び記し、名づけて『搜神記』（日本での読み方には「そうしんき」「そうじんき」の二つがある）とした。他に『周易注』、『周官注』がある。
- 2 原文 テキストは以下を用いた。（晋）千寶撰『新校搜神記』、中國筆記小説名著（世界書局、二〇〇三・二版）。
- 3 現代語訳 これは論者の訳だが、邦訳には次のものがある。竹田晃訳『搜神記』、東洋文庫（平凡社、一九六四・初版）。
- 4 元帝 前掲注「千宝」参照。
- 5 官廷 前掲注「千宝」で記したように、東晋の首都は健康、すなわち現代の南京で、任谷の居住地暨陽からさして遠くはなかった。暨陽は現代の江蘇省南部にある江陰市。
- 6 「婦女を姦童に代用せしこと」 『続南方随筆』（『南方熊補全集』第二卷、平凡社、昭和四十六）所載。
- 7 類例が甚だ少ない 南方熊補が前掲の随筆「婦女を姦童（『美少年』）に代用せしこと」末尾で紹介しているように、中国ではこの種の逸事が幾つか報告されている。もともと、男装した女性の出産に過ぎない、との解釈が妥当だろう。
- 8 千宝が、この顛末実証なり、と納得するだけの諸根拠が揃っていたのだからか 論者がこうも四角四面にかかる話にこだわるのは、千宝が『搜神記』を編んだのはひとえに、（『搜神記原序』に拠れば）「発明神道之不誣」（『神妙で計り知れない道理や法則が虚妄

ではないことを明らかにする」ためだし、また彼が事実を記録することを本分とする史官だったからに他ならない。

9 原文 前掲書『新校搜神記』。

10 現代語訳 これは論者の訳だが、邦訳には次のものがある。前野直彬訳『六朝・唐・宋小説集』、中国古典文学全集第六卷（平凡社、昭和三十四・初版）。竹田晃訳前掲書。どちらも「毛の衣」となっている。なお、前野訳と竹田訳は本質的に同じである。竹田は若干年の折師である前野の訳を贈与された由。

11 羽の衣 「毛衣」には確かに「毛ころも」すなわち「毛皮で作った着物」の意がある（現代中国では「毛糸のセーター」のことも言う）。しかし、「鳥の羽」をも「毛衣」と称し、また「毛羽」も「鳥の羽」を指すので、「毛衣」を「羽の衣」と訳し得る、と思う。

12 衣が（倉に）積み重ねてある稲束の下にあるのを知り「天人女房」なる名称の日本の民話の代表として、関敬吾編著『日本昔話大成』に挙げられている話でも、高倉（＝高床式穀倉）の穀物の束の下にあることを天女が知る。『日本昔話大成』（角川書店、昭和五十三）第2巻。

13 原文 テキストは前掲書を用いた。

14 現代語訳 これは論者の訳だが、邦訳には前野直彬訳前掲書、竹田晃訳前掲書がある。どちらでも身代の価は「一万貫の錢」とされている。一万貫はすなわち一千万文（銅錢一千万枚）である。漢代の奴（男性奴隸）売買の相場は不学にして存ぜぬが、これほど高額だった、とは到底思えない（時代は隔絶しているが清代の一例では、さる高官が美しく若い妾を買うのにその女主人に四十万文を支払っている）。まして、「主人」は董永の孝心に免じて、身代金を棒引きにしよう、と申し出ているので、まずまずの額でなければおかしい。一万文（十貫文）がよいところであろう。これなら、たとえば（実際の購買価値は生活形態が全く異なる時代・風土では算出できないことは重重承知しているが、しかし、なんらかの目安として、仮に）一文二十円とすれば二十万円となり、庶民が相応の柩（二千文くらいか。もっともこれとてまたまた遠く隔たる清代の袁枚著『子不語』所収の一話に拠ったに過ぎず、時代考証もへつたくれもないので、どうかお笑い棄ててください）を求め、市城外の曠野辺りにささやかな墳墓の地を購う費用として不自然な額ではない。

15 小さい車 原文の「鹿車」とは「鹿が一頭しか乗れないような小さな車」をいう。中国に古代から存在する手押しの木製一輪車（孤輪車）であろう。一輪車は、後部の把手を一人の人間が両手で操作することによって、ちょっとした荷物や人間一人を乗せ、これを運搬することができる。

16 葬儀 儒教に則った葬儀では、少なくとも柩を購ってこれに遺骸を納め、風水害などに侵される憂いのない土地を墓地として埋葬し、かつ、しかるべき期間喪に服さなければならぬ。

- 17 百疋<sup>びやく</sup> 一疋は八十尺。
- 18 二丈八尺(約一〇メートル) これは現代日本での換算である。「丈」は古代中国においては成人男子の身長(ほぼ一八〇センチ)に基づく長さの単位で、「尺」はその十分の一、即ち一八センチだった。
- 19 魔術的逃走譚 *Magische Flucht* ドイツ語。主人公が敵から逃走する際、魔術、あるいは魔術的アイテムを用いて、敵の目を眩ませる、もしくは敵の追跡を遅らせるモティーフ。黄泉醜女に追われて黄泉国から脱出した時の伊耶那岐の命のエピソードもこれ(「古事記」上(巻)。英語 *Magic Flight*)。
- 20 「失踪した女房を探す男」<sup>とらごう</sup> 民話語型 (A111400) の (c) 400 The Man on a Quest for His lost Wife. > SUPERNATURAL OR ENCHANTED WIFE (HUSBAND) OR OTHER RELATIVE 400-459. Hans-Jörg Uther: *The Types of International Folktales. A Classification and Bibliography*. ACADEMIA SCIENTIARUM FENNICA. Helsinki 2004.
- (c) の話型の粗筋は以下の文で始まる。「ある若者が一群の鳥たち(白鳥、鴨、雁、鳩)が岸边に舞い降りているのを見る」。A youth watches a flock of birds (swans, ducks, geese, doves) land on the shore.
- 21 『本朝神社考』 江戸時代初期の朱子学者林羅山(法号道春。一五八三—一六五七)著。神道衰微を嘆き、主要な神社の縁起を『古事記』『日本書記』『延喜式』『風土記』などの記事に基づき調査・記述したもの。原漢文。
- 22 古代の『駿河国風土記』の記事としては認められないそうだが、『本朝神社考』五によれば 久松潜一校註『風土記』、日本古典全書(朝日新聞社、一九五九—六〇)所収「逸文 参河国・駿河国」には「三保松原(参考)」として読み下し文と漢文が示されている。内、読み下し文を次に示す(旧字は新字に変えた。振り仮名は読み下しの原文のまま)。
- 風土記を案するに、古老伝へて言はく、昔、神女あり。天より降り来て、羽衣を松の枝に曝しき。漁人、拾ひ得て見るに、其の軽く軟きこと言ふべからず。所謂六銖の衣か、織女の機中の物か。神女乞へども、漁人与えず。神女、天に上らむと欲へども羽衣なし。是に遂に漁人と夫婦と為りぬ。蓋し、己むを得ざればなり。其の後、一旦、女羽衣を取り、雲に乗りて去りぬ。其の漁人も亦登仙しけりと云ふ。(本朝神社考五)
- 23 ……その後羽衣を取りもどし、雲に乗って去った、とある 能・謡曲「羽衣」では、松の枝に懸かっていた羽衣を拾った漁師白龍は、天人の懇願に応じてこれを返却、天人が返却の条件とした東遊を舞いながら天に昇って行く。民話の世界と異なり、常識的・倫理的で、要するにつまらない。
- 24 『帝王編年記』 『帝王編年集成』 『歴代編年集成』とも。僧永祐撰と伝えられるが、確証はない。神代から鎌倉時代後期後伏見天皇

(在位一二九八—一三〇二)までの歴代天皇の年代記に和漢のさまざまな典籍の記事に拠り書き入れがなされる形態。一三六四—八〇年に成立した、とされる。原漢文。

25 「伊香の郡の小江」の説話 前掲書所収「逸文 近江国」には「伊香小江(存疑)」として読み下し文と漢文が示されている。内、読み下し文を次に示す(旧字は新字に変えた。振り仮名は読み下しの原文のまま)。

古老の伝へて曰へらく、近江の国伊香の郡。与呉の郷。伊香の小江。郷の南にあり。天の八女。俱に白鳥と為りて、天より降りて、江の南の津に浴みき。時に、伊香刀美、西の山にありて遙かに白鳥を見るに、其の形奇異し。因りて若し是れ神人かと疑ひて、往きて見るに、実は是れ神人なりき。ここに、伊香刀美、即て感愛を生して得還り去らず。窃かに白き犬を遣りて、天羽衣を盗み取らしむるに、弟の衣を得て隠しき。天女、乃ち知りて、其の兄七人は天上に飛び昇るに、其の第一人は得飛び去らず。天路永く塞して、即ち地民と為りき。天女の浴みし浦を、今、神の浦と謂ふ、是なり。伊香刀美、天女の弟女と共に室家と為りて此処に居み、遂に男女を生みき。男二たり女二たりなり。兄の名は意美志留、弟の名は那志登美、女は伊是理比咩、次の名は奈是理比売、此は伊香連等が先祖、是なり。後に母、即ち天羽衣を捜し取り、着て天に昇りき。伊香刀美、独り空しき床を守りて、唸詠すること断まざりき。(帝王編年記)

26 これまた異類婚と関係なからう。ただし、老夫婦のうち夫の方が天女に性的欲望を燃やすようになったので、その妻がこれを嫉妬し、ために、夫に強いて、いわば黄金の卵を生む鷲鳥である酒釀しの術に長けた天女を、むりやり追い出させた、と推量することは可能。

27 日本民話「天人女房」大成一一八。前掲書『日本昔話大成』第2巻。

28 「人の妻化して弓となり、後に鳥となりて飛び失せし語」佐藤謙三校注『今昔物語』、角川文庫ソフィア(角川書店、平成五、三十七版)に拠れば、原文の書き下し文は左の通り(旧字は新字に変えた)。

今は昔、□□□の国□□□の郡に住みける男ありけり。その妻、形美麗にして有様めでたかりければ、夫去り難く思ひて棲みける程に、妻夫寝たりける間に、男の夢に見るやう、この我が愛し思ふ妻、我にいはいはく、「我、汝と相棲むといへども、我たちまぢに遙かなる所に行きなむとす。汝を今は見るべからず。たゞし我が形見をば留め置かむ。それを我が替りにあはれむべきなり。」と云ふと見る程に夢覚めぬ。男、驚き騒ぎて見るに妻無し。起きて近き辺にこれを求むるに無ければ、あさましと思ふ程に、本は無かりつるに、枕上に弓一張立ちたり。これを見るに、夢に形見と云ひつるはこれを云ひけるにやと疑ひ思ひて、妻もしなほ

- や来ると待てども、遂に見えずして、夫恋ひ悲しぶと云へどもかひなし。これは若し鬼神なむどの変化へんげしたりけるにやとおそろしく思ひけり。さりとして今はいかゞはせむとすと思ひて、其の弓を傍かたわらに近く立て、明暮妻の恋しきま、には、手に取り、かい拭ぬぐいなどして、身をはなつ事無かりけり。
- さて月来をふるほどに、その弓前に立ちたるが、にはかに白き鳥となりて飛び出でて、はるかに南をさして行く。男、あさましと思ひて出でて見るに、雲に付きて行くを、男尋ね行きて見れば、紀伊国に至りぬ。その鳥、また人となりにけり。男、さればこそ、これはたゞものにはあらざりけりと思ひて、それよりぞ返りにける。
- (中略) 此の物語、おくゆかしく現にとも思へぬ事なれども、旧き記に書きたる事なれば、かくなむ語り伝へたることや。
- 29 いわゆる『古エッタ』の「ヴェルンドの歌」『古エッタ』は成立年代九世紀、故郷はノルウェイ。V・G・ネッケル/H・クーン/A・ホルツマルク/J・ヘルガン編谷口幸男訳『エッタ—古代北欧歌謡集』(新潮社、昭和四十八)に拠る。
- 30 J・K・A・ムゼーウスの「奪われた面纱」ムゼーウス、ヨーハン・カール・アウグスト著鈴木満訳『リユーベツァールの物語—ドイツ人の民話』(国書刊行会、平成十五)所収。
- 31 「バツソラーのハッサン」バートン、リチャード著大場正史訳『全訳千夜一夜物語』、角川文庫(角川書店、昭和二十九・初版)、第七百七十九夜、第八百三十一夜。なお現在では、ちくま文庫(筑摩書房)版が入手し易い。ちなみにフランスのマルドリユス版「ハッサン・アル・バシリ」——豊島・佐藤・渡辺・岡部訳『千一夜物語』、岩波文庫(岩波書店、昭和二十九・初版)——では、第五百七十六夜、第六百十五夜と短い。
- 32 フィンランド学派 フィンランドの口承文芸研究者アンテイ・アールネの研究方法である、民話の類話をできるだけ広く収集、これを比較検討して問題点を探る方法を取る学派。
- 33 「女房が鳥になって夫の留守に去るが夫に謎の言葉を残して自分の居所を解かせる、という形になっているものもある」トンプソン、ステイス著荒木博之・石原綾代訳『民間説話——理論と展開——』、教養文庫(社会思想社、昭和五十二)上 第二章。原著 *Sith Thompson: The Folklore*. New York, 1946.
- 34 ツァウネルト、ハウル編『クリム以降のドイツ昔話』十一番「狼師と白鳥乙女」Hrsg. von Paul Zaunert: *Deutsche Märchen seit Grimm*. 1912/22. Neuauflage in einem Band. Bearbeitet und mit Nachweisen versehen von Eilfriede Moser-Rath. Diederichs Verlag. 1976. Nr.11 Der Jäger und Schwamjungfrau.
- 35 白鳥乙女 この「白鳥乙女」は元来人間、それもある王家の三人の姫君の末の妹。どうやら、どこかの魔法使いがこの乙女に惚れ

- 込んだが、相手が一向に靡かないので、言うことを聴くまで王家の人人はもとより王国全体をガラスの山の奥底に呪封し、時折三人の姫に遠くの湖での沐浴を許したもののらしい。
- 36 「母様。私にまた逢いたいという人はガラスのお山に来なくてはなりません。……それではご機嫌よろしゅう」ツァウネルト、パウエル編鈴木満訳・注・解説「狐師と白鳥乙女」。「武蔵大学人文学会雑誌」第三十二巻第二・三号（平成十三）所収。この切切たるメッセージに応えた夫は僻遠の「ガラスの山」に行き着き、呪いを解いて、妻と妻の属する王家の人人と王国全体を解放する。
- 37 安倍晴明 平安時代に実在した稀代の陰陽師（九二二—一〇〇五）。天文博士。播磨守。佐藤謙三校注『今昔物語』巻第二十四第十六「安倍晴明、忠行に随ひて道を習ひし語」にその伎倆のほどが記されている。
- 38 インドには蛙の王女が美姫に変身、……王は妃の素性を知っても幸せである 鈴木満訳『世界の民話』8 中近東、ぎょうせい（昭和五十二・初版、平成十一・新装版）所収、三十五「かえるの王女」。
- 39 ……と述べている 前掲書『民間説話——理論と展開——』下 第六章。
- 40 「鶴女房」 大成一一五。前掲書『日本昔話大成』第2巻。
- 41 「蛤女房」 大成一一二。前掲書『日本昔話大成』第2巻。
- 42 雪女でさえ、何年か睦まじく暮らしたあとでは……禁忌を破った夫を……取り殺すことができずに去る 小泉八雲著『怪談』(Kwaidan) 所載。平川祐弘編訳『怪談・奇談』、講談社学術文庫（講談社、一九九〇）など。
- 43 『北宋三遂平妖伝』 馮夢龍作太田辰夫訳『平妖伝』、中国古典文学大系三十六（平凡社、昭和四十一・初版）。
- 44 小狐胡媚兒の艶っぽい挿話（第十五回）でも大いに発揮されている 日本二十回本『三遂平妖伝』には狐は全く登場しない。
- 45 「聊齋志異」 蒲松齡著柴田天馬訳『完訳聊齋志異』全八巻、角川文庫（角川書店、昭和三十）。
- 46 擬話本 話本を増訂、時に話を創作して、話本の体裁を保ちつつ、読み物として刊行したもの。
- 47 「或いは馮夢龍の創作かも知れない」 駒田信二他訳『三言二拍抄』、中国古典文学全集第十九巻（平凡社、昭和三十七・再版）所収 解説（松枝茂夫）。
- 48 原文 李昉等撰『太平廣記』（中華書局、一九九六・第一版）。「虎類」巻四百二十七 二「天寶選人」。
- 49 都長安に旅する 中央で行われる最終試験の「会試」のため首都に赴くわけ。
- 50 おそらく全裸で寝ていたのである 中・近世の中国では全裸で眠るのは女性であっても別段異常なことではなかった（中世ヨーロッパの王侯貴族や都市のしかるべき市民の夫人、令嬢でも同じ）。そして、図らずもこのような姿の妙齡の婦人を見た男が不埒にも劣情をそそられる、という筋書きに繋がる。（ヨーロッパや中近東、あるいは日本の「白鳥乙女」も羽衣を脱いで沐浴していた折、

- 羽衣を奪われる。従って、これも全裸だった、と解釈してよからう。
- 51 民話「誇りを傷つけられた野牛女房」を紹介している。前掲書「民間説話——理論と展開——」下 第六章
- 52 原文 前掲書。「虎類」巻四百三十三 二十二「崔韜」
- 53 宿駅 唐代、幹線道路である官道にはおおよそ三十中国里(約一六キロ)ごとに公用に供する官駅が設けられていた。これを活用すれば政庁の急使は次次に馬を換えて迅速に使命を達し得たし、普通に旅する官吏もやはり乗り換え馬を調達したり、宿泊することができた(崔韜はこの時まだ官吏ではなかったが、官吏候補生ともいうべき秀才か拳人になっていたので、ここに泊まる資格があったのだらう)。もとより、こうした場所には民間の宿その他一般の旅人のための施設も集中、宿場として繁盛したのである。
- 54 うちの男たちは獵師が稼業です。これで娘の自分が、なんと虎の皮の外套などを所持する説明にしているわけ。
- 55 原文 前掲書。「虎類」巻四百二十九 八「申屠澄」
- 56 無位無冠の身から「布衣」は「庶民」の意。ただし、ありきたりの庶民ではなく、幼い頃から勉学に励み、科擧の最終試験である首都長安での会試に合格し、官吏に登用されたのである。この物語の背景は既に中唐の時代なので、あるいは会試とは関係なく、権門勢家の眷顧を得て任命が叶ったのかも知れないが。
- 57 外から 納屋が別にあつたのである。
- 58 酒杯を巡らし 一つの大きな酒杯を上座から下座へ、そしてまた下座から上座へ回して行く酒の飲み方。
- 59 酒令 酒宴を行う時、あらかじめ規則を設けておき、これに従って飲酒する遊び。酒杯が巡って来ると、これを手にした者がただちに詩を作る(西晋の政治家で大富豪だった石崇がその別業の庭園金谷園で開いた酒宴での故事など)、とか、この物語でのように、經典やしかるべき詩書から適切な一句を引く、というのがよくある酒令で、できなければ罰として定められた量の酒を飲まねばならない。もっとも、このように高度の教養が要求されるものばかりではなく、一座の一人に抱かれた猫が啼いたら、その時酒杯を手にしていた者がそれを飲み干すこと、などという他愛ない類もある。
- 60 厭厭として夜に飲み、酔わずして帰ること無し 出典は『詩経』小雅・湛露。
- 61 あら、お空がこんな風なのに、どうしてどこかへ帰れませぬの。乙女は澄を擁抱したのである。妙齡の娘が同座の若い(しかし年下ではない)、初めて遇ったばかりの異性にこうして、く軽くでもジャブを浴びせるのは、もとより関心があるからで……。
- 62 風雨晦きが如し、鶏鳴已まず、出典は『詩経』国風・鄭風。乙女は、澄の酒令の句が『詩経』に拠ることを知って、自らの酒令の句もそれから引用。澄が乙女の聡明さに驚嘆したのはもともとである。更に付け加えれば、この句が入っている詩は恋人と一夜を明かした女性の喜びの歌なので、澄は、乙女が自分に十分好意を持つている、と推測したのかも知れない。

63 その俸禄は甚だ薄い。科挙の最終試験に合格すると、その成績如何でさまざまな官職に就けられるわけだが、下級地方行政官である県知事（＝県尉、県宰、知県）は気苦勞のみ多くして、更に清廉に職務を遂行する限りさしたる収益にもならない地位だった。唐代の「県」は日本のそれとは異なり、小さい行政区画。通例、城壁で囲まれた一城市（県城）とこれを中心とした半径百五十中国里（約八〇キロ）ほどの田園地帯である。ここの行政・司法・徴税・公安等々の全てを長として管理し、二十余から数十の県を統括する州の長官（＝刺史）に報告する義務を負い、何らかの失策があれば、あるいは、あつた、と上長に断じられれば、相応の譴責を受けなければならなかった。任期は通常三年。任期が満ちると他の県に転任させられる。上長の刺史ないし中央政府に功績を認められれば、首都のしかるべき職（＝京官）などに抜擢されるが、さしたることもない場合は生涯の大部分を地方官（＝外官）として転転とする——唐代の官品（品階）であれば、従七品上から正五品上までは上がるが——羽目になる。

64 甚だ親族に厚く、甥や姪をよく可愛がり。澄はまず単身赴任した（ただし、途中で妻帯の身となつた）のだが、そのうち故郷から一族を呼び寄せたわけ。

65 梅福 生没年未詳。前漢の人。字は子真。九江郡寿春（現江西省）の生まれ。学問に優れる。南昌県（現江西省）の県知事となつたが、やがて官を退く。しかし、引退した寿春の地から当時の皇帝である成帝に、国家を憂うる献策をした。成帝はこれを探らなかつたが、要するに梅福は（申屠澄と同様）たかが下級地方行政官なのに、大いに高潔な風格の持ち主だったのである。

66 孟光 生没年未詳。後漢の人。後漢の名士梁鴻（字は伯鸞）の妻。孟家の娘光は容貌こそ醜かつたが極めて徳性高い女性だった。夫の選り好みをして、三十歳になつても未婚だった。父母に、どういふ男となら結婚するのか、と訊かれ、梁伯鸞様のようなお方となら、と答えた。これを耳にした梁鴻は（それまでに縁談が降るようになつたのに）、孟女を妻に、と望んだのである。孟光は髪を整え、化粧をし、さらびやかな衣裳を纏って嫁いだ。ところが梁鴻は七日経つても妻として扱わなかつた。孟光がその理由を問うと、梁鴻いわく。わたしは、粗衣を着て、共に深山に隠棲できるように身なりを改め、健気に働き始めた。梁鴻は、それでこそわたしの妻だ、と喜んだ。貧しい生活だったが、妻は夫が仕事から帰ると、食事を載せた膳を肩と同じ高さには捧げ持って進めた（「拏案斉眉」）。また、夫も妻を尊び、夫婦はお互いに賓客のように敬い合った（「相敬如賓」）、とのこと。従つて「孟光」は「妻の龜鑑」を指す。もっとも単に「妻」の別称とすることも。ここではもちろん前者。

67 「正夫人ではなく」却つて側女のように見えるだけです。中上流階級の教養ある人士の奥に養われる姫妾（側女・側室）は、主人を樂しませ、またその交友を和やかなものにするのが務めだったから、通常、歌舞音曲、作詩の道をも仕込まれていたのである。これに対し正夫人は、家政をうまく切り回し、家内外の人事をしかるべく処理、更に子息を生み育むことができれば、それでおお



そ全ての義務を完璧に果たしたのであって、詩を作る、といった遊び事で夫やその友人知己の相手をするには及ばなかった。  
 68 利州（現四川省広元市の一部）を過ぎて、澄はこれまで既に県知事を歴任していて、この時はもう物語冒頭に記された什邡県（現山東省）ではなく、（おそらく）現四川省辺りのどこかの県を治めていたのである。利州は蜀（現四川省）の中心城市成都から（現陝西省の中心城市西安に当たる）大唐帝国の首都長安への官道の間。真符県もこの北方にあるので、虎乙女の実家はこの街道沿いだった、と思われる。

結びに一言。

「白鳥乙女」と「虎乙女」については既に一度、拙著『昔話の東と西 比較口承文芸論考』（国書刊行会、平成十六）の巻末の一章「糞虫はだれの子か」の中で、僅僅十数ページではあるが、取り上げたことがある。今回はそれを大幅に補足訂正した。とりわけ『河東記』の「申屠澄」は、ごく簡単な粗筋に加えて原文の一部とその読み下しとその部分の試訳を記したに過ぎなかったが、本小論では全文を紹介、できる限り注を施した。

今回も東京大学大学院中国語中国文学博士課程後期に在籍の長女鈴木弥生に漢語の解釈に際して幾つか力添えを請うた。ただし、漢語・漢文を含めて小論の全てが論者一個の責任に帰することは申すまでもない。

なおこの機会に先行の一論文を明示してその学恩に深謝する。大室幹雄「虎の妖怪学ノート」である。これはロバート・ファン・フリーック著松平いを子訳『中国梵鐘殺人事件』（三省堂、一九八九）の解説として書き下ろされたもので、人が虎に変容し、虎が人身を取る中国の物語の数を、深い洞察と共に論じ来たり論じ去って、まことに間然する所がない。